

日本語とベトナム語

－ その歩み方の比較 －

グエン・ホアイ・トゥ

はじめに

近年、ベトナムでは日本の経済協力と日本文化ブームのため、日本語を勉強する人が激増している。しかし、日本語を専門的に研究する人は少なく、広く勉強されてはいるが、深く理解されていないというのが現状である。それは、学生が「親しみ」を深く感じにくく、何処かに抵抗感に似た感情を持っているからと思われる。日本語を深く理解するためには日本の歴史をある程度知らないと、現代の日本語も理解しにくく、さらに、ただおかしいと思っ込んでしまうだけである。そのような現状を少しでも改善したいと思う。本稿はベトナムにおいて日本語の歴史的变化の面白さを紹介することを目的としており、詳細なものではないが、多くの人が理解できるように書いたつもりである。また、日本語の変化の過程をベトナム語の場合と比較し、言語が他の国の言語にどのような影響を与えるものであるかを考察したい。

I. 日本語と文字

(ア) 無文字時代

大野晋によると、縄文時代の早い時期に日本列島に住む人々はタミール語¹に属する言語を話していた。そして、文法の面では朝鮮語の祖語、語彙の面では東南アジア諸語、発音の面ではポリネシア系の民族の言語と関係があると見られる。つまり、日本でいくつかの民族が融合したことにより、言語も入り混じったということであるが、中国の『隋書』には、倭国が「無文字、唯刻木結繩」ⁱⁱとあり、木管や、縄の結び方と結び目によって物事や数を表していたようだ。

ベトナム語も何回か融合があった。まず、(1)現在のベトナムの位置に最初に住んだ人たちはモン・クメール系の言語で話した。なぜそれが分かるかというと、体の部分を指す言葉がモン・クメール語と同じだからである。その後、(2)タイ語系言語で話す Au Viet という民族がやって来た。「丘、空、色」など、生活の中でよく目にするものの名前が現代のタイ語と似ていることから、そのように考えられる。そして、(3) Lac Viet 族がやって来て、最初の王朝が建てられた。その時代、ベトナム人は現代のタイ語と似た言語で話していた。

(イ) 文字の移植

日本は、630年から、遣唐使によって中国語を学び、漢字で記録し始めた。漢字は中国語を記録するために作られたものだから、自分たちが持たないものを学ぼうとすれば、日本人もベトナム人も中国語を学ぶしかなかった。つまり、その時代、どちらの国も、文字

で書かれているものは中国語そのものだったのだ。

当時、漢語は学んで当然のもので、近代になると日常語にまで浸透した。そして、できるだけ多くの言葉を漢字で表記しようとする傾向が強くなり、「明日(あした)」のように、日本固有の言葉までも漢字を借りて表記しようとした。そして、外来語(専門用語など)や外国の地名・人名の表記に漢字を当てはめることが盛んに行われた。仏蘭西(フランス)、華盛頓(ワシントン)などが代表的な例である。

日本の場合には遣唐使が中国へ学びに行き、間接的に中国の政治などを学ぶだけだったため、発音の面では最初から中国語と違っていたが、ベトナムの場合は国家として独立した938年以降、中国人がベトナムからいなくなったため、発音の面で次第に中国語と違うものになっていく。日本では音読みというものが生じたが、ベトナムでは漢越語(借用語)になり、現代ベトナム語の語彙の60-80%を占める。

938年以降、中国人はベトナムからいなくなったものの朝貢使節の派遣による接触があったし、辺境地域では貿易による交流もあり、日本語と同じように中国語との交流が続いた。しかし、首都の中国語も辺境の中国語も中国人には通じなくなっていた。朝貢使節が学んできた言葉は政治、思想などに関するもので、貿易によって取り入れたのは食べ物の名前など、分野も言葉の形式も違った。首都の中国語の方は漢越語彙になるが、庶民は単語のまま、漢系外来語として借りただけである。漢越語彙は個々に意味を持っているのに対し、漢系外来語は印欧系の外来語と同様に音を借りただけのため、漢字一つだけでは意味を表していないところが違う。例えば、「Hà Nộiⁱⁱⁱ(ハ・ノイ)」は漢字で「河内」と書くが、「ハ」が「河」、「ノイ」が「内」を意味している。貿易によって学んだ言葉「xá xiu(サ・シュ)」は「チャーシュー(焼き豚)」のことだが、「サ」も「シュ」も意味があるわけではない^{iv}。

日本語とベトナム語の文字を取り入れ方の違いはまとめると、表1と表2のようになる。

音読みは入ってきた時代により違いがある。日本では呉音、漢音、唐音、宋音がある。ベトナム語も同様で、そこから多くのことが分かる。例えば、千年ぐらい前の文書では「房」が「bông」と読まれていたが、その後、「phòng」と読むようになった。そのことから、千年位前、中国語には「p」の子音がなかったことが分かる。大きく分けると、唐の時代以前に取り入れた旧漢越音読みとその後の新漢越音読みがあり、例えば、「日本」は旧漢越音読みで「Nhật Bản - ヌト・ボン」と読むが、新漢越音読みで「Nhật Bản - ナト・バン」と読む(表3)。

しかし、やはり中国語は中国人の心を映すものであり、日本語とベトナム語を表記するには適していないところがいろいろあった。その対策として、日本人は漢字の表意性を無視し、音だけを借りて日本語を記したのだが、この万葉仮名を自在に使用した。ベトナムの場合、中国語にない言葉には新しい漢字を作った。これは「字喃(chữ Nôm・チュノム)」と呼ばれる。日本語の「埼、凧、辻…」など国字と同じだ。

万葉仮名は上で述べたように、漢字に意味があるにも拘らず、音だけを借りて書く。万

葉仮名は句読点もなく、間もおかれず、大文字小文字の区別もなかった。

例: ちちははがかしらかきなでさくあれていひしけとばぜわすれかねつる たけべのいなまる
知々波々我可之良加伎奈豆佐久安例豆伊比之氣等婆是和須礼加祢豆流(文部稻麻呂)

読み方：

ちちははがかしらかきなでさくあれていひしけとばぜわすれかねつる

漢字仮名混じり：

父母が頭かき撫で 幸くあれと 言ひし言葉ぞ 忘れかねつる。

意味：

父と母が頭を撫でて、元気でいろよと言った言葉が忘れられない。

国字(和字)は山の上下りをするところを「峠」としたものなどがあるが、その多くは、日本にしかいない動物の名前だ。そのうち、最も多かったのは魚の名前で：雪の降るころの魚が「鱒(たら)」、弱い魚を「鰯(いわし)」、そして「鱧(きす)」、「鯰(なまず)」などがそうだ。

「心配」「返事」「大根」のような新しい言葉も作られたが、「慰安、簡単、段階、増加、限界、紹介、制限、平和、刺激、点検、食料、例外」など、前後を逆にしたもの、「手段」など漢字がちょっと変わったものもあれば、意味が変化した漢語もある。「手紙」は中国語では「トイレットペーパー」というのは有名な話だが、そういう例を少し挙げてみる。(例1)

ベトナムにも同じ現象があり、「博士」は「医者」を意味するように変化した例である。

一方、発音の面ではベトナム語は中国語の影響で声調を使うようになったと見られるが、日本語ではそういうものはあまり見られない。宋の時代に宋音の影響でそのころまで [ti][tu] と発音していた「ち」「つ」が現在と同じ [tʃi][tsu] となったが、このようなものは珍しく、例外である。

万葉仮名は「加→カ 介→ケ 多→タ」のように片仮名に簡略化されたが、万葉仮名からはさらに平仮名も作られた。同じ表音文字なのに、片仮名だけでなく平仮名も発明されたのは、平仮名は女性の間で和歌・手紙の文字として用いるためと考えられる。

中国との交流の結果、漢字が使われるようになっただけと考えられやすいが、文字以外に、語彙、読み方、新しい文字などもその結果と言える。

日本は上で述べたように間接的に中国語を学んだため、大きくは変わらなかったが、ベトナムは紀元前 179 年から 938 年まで千年以上、公式に中国の支配下にあった。なぜベトナム語は完全に中国語に取って代わられなかったのか。中国の支配は僻地の村落まで影響を及ぼさなかったからである。昔の日本と同様、一般人は支配階級とは異なり、自分の村で一生を過ごすため、官僚以外は中国語を使う必要はなかった。

また、同じ漢字について、音読みは中国から、訓読みは元々日本にあった言葉と言われる。しかし、「寺」という字を例にとると、「ジ」という音読みは当然だが、そもそもお寺

が日本にあったはずはないのに、なぜ「テラ」という訓読みがあるのか。「ジ」は中国から来た読み方で、「テラ」は梵語から朝鮮語を経由して来たと考えられる。ベトナム語にもそのような現象がある。「仏（ほとけ）」のことは漢越言葉で「Phật(ファット)」、もともとベトナムにあった言葉で「But(ブット)」だが、明らかに語源は同じサンスクリット語の Buddha だ。これが中国語を経由して「ファット」、タイ語を経由して「ブット」になったが、その後、その二つの言葉は意味が違ってきた。お寺などで祭ったのは「ファット」、昔話の中で優しいおじいさんに変身して、困っている人を助ける人が「ブット」となった。

II. 現代日本語への変化

江戸時代の終わり、参勤交代のおかげで、共通語として江戸語はすでにある程度普及していたが、さまざまな日本語が共存し、複雑な様相を見せていた。

動詞は四段、上一段、上二段、下一段、下二段、カ行変格、サ行変格、ナ行変格、ラ行変格、色々な活用があった。助動詞も多く、使い方は複雑だった。例えば、「べし」は推量〈～だろう〉も、意志〈(よ)う〉も、当然〈べきだ、はずだ〉も、可能〈～ことができる〉も、命令〈～なさい〉も意味した。

この時代の問題は日本語の表記を統一することとまだ知り始めたばかりの欧米の文化、技術に関する語彙を移入することだった。

2.1 日本語の表記の統一

仮名遣い（表4）

当時、表記に使われた文字も仮名遣いは複雑だった。仮名は音を表すためにわざわざ作られたのだが、例えば、「ゐ」でも、「ひ」でも、「い」でもイと読む。逆に、「ひ」はヒと読む時もあるし、イと読む時もある。漢字も多すぎ、近代化には障害となった。文字については、多くの改良が行われた。1953年には文字表記を統一するためにローマ字のつづり方が、1958年には送り仮名の付け方が、1981年には「常用漢字表」が、1986年には「現代仮名遣い」が、1991年には「外来語の表記」が公布された。

現代仮名遣い、例えば、「氷」と「公園」の最初の二拍の発音は全く同じであるにもかかわらず、「こおり」と「こうえん」と書くよう決められている。「続（つづ）く」と「涼（すず）しい」、「鼻血（はなぢ）」と「味（あじ）」なども同様だ。

歴史的に大きな変化となるが、鎖国が終わり、欧米の知識を大量に学び始める。その翻訳の仕方は以下ようになる。

- イ. 中国語からの借用：権利、会議、化学
- ロ. 中国古典からの転用（語源も）：経済、自由、観念
- ハ. 新たな造語：哲学、理想、感性

直訳：良識、冷戦
意識：主義、国際
音訳：包帯（例2）

また、学んだ分野も国によって違う。

フランスから：軍隊、美術、音楽、料理など
ドイツから：思想、化学、医学、政治など（例3）

さらに、和製外来語、外来語の定着度が高まり、必要に応じて新しく合成されもした。

略語：OL（オフィス・レディ）、KY（空気が読めない）
混成語：省エネ、アル中

訳語として国字も作られた。例えば、センチを「糎」とした。

ベトナムもかつて、フランス語を多く取り入れたが（例4）、他にもいろんな言語から取り入れている。その中でベトナムに入った日本語をいくつか見てみよう。

1. 中国語（漢字）を経由して取り入れた：自由→tự do（トゥヅ）
2. 読み方を借りた：盆栽→bonsai（ボンサイ）
3. 両方：空手道、合気道など
4. 意味を変えて使う：例えば、osinは「おしん」というドラマから借り、「お手伝いさん」という意味で今でも使っている、hondaは自動車会社のホンダから来ているが、当時ベトナムにあるバイクはほとんどホンダ製だったため、間違っって「バイク」という意味で使っていた。しかし、現在は死語になりつつある。

日本語でもベトナム語でも、新しい言葉ができた後も、変化は続く。「若者言葉」には共通点が多く、言葉の意味が変わったり、地方の方言が人の移動によって都会に入り、マスコミで使われたりするようになる。日本語では、例えば、「どや顔」の「どや」は関西弁の「どうや」からきている。また、外来語は新たに取り入れたものを表すため、日常会話でそれまで普通に使われていた言葉に取って代わるようになる。例えば、「乗合自動車」より「バス」が、「桃色」より「ピンク」の方がよく使われるようになった。

Ⅲ. アルファベット化、その長所と短所

同じ漢字文化圏だが、ベトナムの場合を考えてみよう。

ベトナム語は、Alexandre de Rhodes (アレクサンドル・ド・ロード) という伝道師によってラテン語を元に表音文字化されたという説が有力だ。彼は 1627 年にベトナムに来て、当時使われていた中国の漢字を、ラテン語をもとにローマン文字に変え、布教した。この表記法は、クオック・グー (国語) と呼ばれている。クオック・グーは伝道師の間に短期間で広がり、1651 年にはローマで「ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞典」という 3 国語対照辞典が出版され、この辞典がクオック・グー普及の原点となった。そして、20 世紀に入ると、ベトナム社会全体に普及した。そして、同時にフランスの単語もたくさん取り入れた。

アルファベット化の利点

ローマン文字は簡単で学びやすいという長所があることは議論するまでもないが、ベトナム語の語彙の多くは中国語でできており、金田一はベトナム語が漢字を使わなくなってしまったことで、意味がわからず困っていないかという疑問を示した。しかし、全然困ることはなかったと自信を持って言える。

ベトナム語には単母音が 11 (a ă â i u e ê o ô o) ある。また、二重母音、三重母音もある。さらに、声調が六つある。そのため、同音語はかなり少なくなり、一つの音節だけで一つの意味を持たせやすい。アルファベットは表音文字だが、ベトナム人がローマン文字で表記された言葉を見て理解する意味は、中国人が漢字を見て理解する意味とまったく変わらないとさえ言える。それゆえ、理解できるだけでなく、「自由・経済」など日本で作られた漢字の語彙も、「全球化」など中国で新しく作られた言葉も簡単に取り入れることができた。

簡単で覚えやすいという長所があるローマン文字を使っているおかげで、アルファベット系の言語に親しみやすく、学びやすい。これは大きな利点と言える。

弱点

ベトナム語は毎年新しい外来語が増えていくことで、強く批判されている。そして、国語の授業では、「ベトナム語の純粋さを守る」という科目が追加され、マスコミもその目標を掲げ、強く訴えている。これに対し、日本語はまったく抵抗を感じずに外来語を多く取り入れているが、そんな外来語はカタカナで表記するため、常に違和感がある。一方、ベトナム語はローマン文字系の外来語が簡単に入り込み、ベトナム語の語彙を変化させやすいという欠点がある。それはベトナム語の単語の基本的な構造が、CVC (C: 子音/V: 母音) となっているからである。C がない場合も、*nghiêng* のように CVVC になる場合もあるが、CVCV は存在しなかった。しかし、外来語の影響で語形が変わったもののがかなりある。*photocopy* のように CVCVCVCV のような語彙も出てきた。また、*f, j, z, w* はベトナムのアルファベットにないのだが、若者の話し言葉にも書き言葉にもよく見られるようになった。例えば、*giờ* (ゾ - 時)、*vây* (バイ - さて)、*quê* (クエ - 地元、田舎)、外来語の

phim (フィルム - 英語の film) は jờ、dzây、wê、fim になっている。特に、2006 年から、教科書が新しくなるとともに、そういう傾向が強くなってきた。それまでは読むとおりに書く、そして、自分たちの言語に合わせて作り直す。例えば、かつて、「横浜」、「名古屋」は I-ô-cô-ha-ma、Na-gôi-a と教科書に書かれていた。しかし、これでは実際使われている発音と違いすぎ、調べようとしても調べにくく、その言語に対する敬意がないと言われる。外国の固有の発音をする言葉は外国語として扱い、世界で使われているとおり、中国のものは漢字音読み、日本のものはへボン式で、韓国のもはマックイーン・ライシャワー式でローマ字化したり、漢字の音読みで取り入れる。例えば、「福沢諭吉」は Fukuzawa Yukichi と書けば、漢字の音読みで Phúc Trạch Dụ Cát と書く。そのような表記方法が普及し、bluetooth などのような外国語はそのまま取り入れることになった。

おわりに

レポートは「日本語と文字」と「現代日本語への変化」、「アルファベット化、その長所と短所」の三章の構成で、日本語とベトナム語がその歴史において現在までたどってきた変化の過程、ほかの言語の影響でどのように変化したかを考察した。

第一章では、日本語が仮名と国字など、違う言語の文字を日本語が表記できるように作りかえたやり方を、同じ中国文化圏ではあるが、漢字の吸収のし方の違うベトナム語と比較した。

第二章では、そのように作った文字を統制したり、自在に使って新たな言葉を作ったりすることで、現在の状態に至った道を確認した。

第三章では、アルファベット化の長所と短所を確認した。

言語の歴史は、語彙の層にも見られる。日本語とベトナム語は本来語という下層がそれぞれあるが、漢語の中層と印欧語で構成された上層があるのはほぼ同じだ。

日本語とベトナム語の歴史は以下のようにまとめられる。

ベトナム語の場合：

1. 中国によって支配され、中国で話しもし、書きもした。
2. 独立してからも、漢字で書いたが、読み方はだんだん中国語と違っていった。日本語の音読みの場合と同じだが、漢越語彙は、現代ベトナム語の語彙の 60-80% を占める。
3. 漢字を使うが、ベトナム語の文法を使って書き、中国語にない言葉は新しい漢字を作った。日本語の「埼、凧、辻…」と同じで、「佇喃」と言う。
4. フランスに支配され、アルファベット化する。

日本語の場合：

1. 遣唐使によって中国語を学び、漢字で記録し始めたが、中国語として使う一方、万葉仮名として使い、使い方がさまざまだった。

2. 漢字からひらがなとカタカナを作った。

参考 I : 表

表 1

	日本語		ベトナム語
無文字時代	朝鮮語、東南アジア諸語、ポリネシア系の民族の言語の祖語の混じった言語だった。		現在のタイ語と似た言語だった。
文字の移植	中国語で書いていた。		中国語で話し、書いていた。
	音読みというものが生じた。	発音の面で次第に中国語と違うものになっていく。	漢越語として借用したものが作られた。
	万葉仮名を使用した国字を作った。 万葉仮名は片仮名と平仮名に簡略化された。	表記するには適していない点が多い。	「𣵵喃 (chữ Nôm・チュノム)」という新しい漢字を作った。

表 2

ベトナム語	日本語
貿易、戦争、政治によって接触	文化の交流によって接触
漢字から作った文字は意味を表す。	漢字から作った文字は音声を表す。

表 3

	旧漢越音読み	新漢越音読み
味	Mùi (ムイ)	Vị (ビ)
放	Buông (ブオン)	Phóng (フォン)
舞	Múa (ムア)	Vũ (ブ)
晩	Muộn (ムオン)	Vãn (バン)
解	Cởi (コイ)	Giải (ザイ)
誇	Khoe (コエ)	Khoa (コア)

表 4

当時の仮名遣い	読み方	例
ゐ	イ	ゐる (居る)
ゑ	エ	こゑ (声)
を	オ	あを (青) をいてはこにしたがふ
は	ワ	かは (川)

ひ ふ へ ほ (語頭以外)	イ ウ エ オ	かひ (貝) やすもの かひの ぜにうしない くふ (食う) かへす (返す) せに はらは かへられぬ なほぎり (なおざり)
ぢ づ	ジ ズ	ぢく (軸) われなべにとぢぶた づきん (頭巾) としよりのひやみづ
くわ・ぐわ	カ・ガ	くわだん (花壇)
あう・いう・えう・おう (「う」の代わりに 「ふ」が来ても同じ)	オオ ユウ ヨウ オオ	例：きよう、きやう、けう、けふ→きょう かうし (格子) れうやくは口に苦し。

表 5

	ベトナム語の場合	日本語の場合
1.	我是越南人。 読み方：Ngã thị Việt Nam nhân.	漢字によって記録
2.	粹丹馱越南。 読み方：Tôi là người Việt Nam.	
3.	アルファベット	

意味

音

参考 2：例

例 1

「大丈夫」は「身長が高い男 →立派な男」を意味する漢語だったが、室町時代には「しっかりしているさま」「気の強いさま」という意味で形容動詞として用いられるようになった。元々、丈夫と大丈夫は意味に違いはなかったのだが、「丈夫」は「心配がない」「あぶなげのない」という意味になった。

「勉強」は「本意、したくないがしかたなくする→学習する」

「格好」は、本来「ちょうど良い」という意味で、現在でも、形容動詞として用いられている。この原義「形がちょうどよい」から「姿、形、見かけ」という意味になった。

「我慢」は仏教語で「自分に執着する」というで、「自慢」とよく似た意味の言葉だった。ただ、「我慢」には、心の中で我意を張り通そうとする気持ちの強さもあり、その意味から江戸時代後期に「辛抱する」という意味に転じた。

「勘弁」：「物事の理非善悪をわきまえる→物事をうまくやりくりする→他人の誤りを許す」と変わってきた。

「景気」：「自然の景色・様子→人間の有様・様子→商売などの状況」

「心外」：「思いのほか、以外→まったく予期に反して残念」と変わった。

例 2

「自由」：もとは漢籍の言葉で、「勝手気まま」の意。日本の『続日本記』（しょくにほんぎ）などにも例がある。幕末期、当時の通詞（つうじ：通訳をする役人）が訳語として提案したといわれる。

「文化」：古く漢籍にも見られる言葉、明治時代には英語の *civilization* の訳語として、「文明」とほぼ同義に用いられていた。初期のうちは「文明」が一般的だったが、中期頃はドイツ哲学が広まると、次第に「文化」が多用されるようになった。

技術革命にともなう物質な成果も「文明」、人間の精神的活動の成果を「文化」のように区別して使うことが多い。

「観念」：心を静め、仏の姿や仏教の真理を思い浮かべること。知恵によってあらゆることを観察すること。

明治に入り、西周が英語の *idea* の訳語として用いてから、ある対象について抱く意識内容を指す哲学用語として定着した。

「社会」：明治八（一八七五）年に小説家で新聞記者の福地桜痴（おうち）が東京日日（にちにち）新聞で使ったのが最初の例といわれる。それまでは、「交際」「仲間」「社中」などを訳語に当てていたという。

「経済」：「経世済民」または「経国済民」を略してできた言葉。いずれも、世（あるいは国）を治めて、民の苦しみを救うことをいい、「政治」を意味した。なお、現在の意味の「経済」は明治後期から一般化された言葉で、それまでは「理財」という語が使われていたという。

「哲学」：明治初期に、西周が著書『百一新論』で初めて使った言葉。当初は「希哲学」「理学」「窮理学」「希賢学」などと呼ばれたが、明治二十年ごろには「哲学」が定着した。

「理想」：もとは哲学用語で、最高の状態を意味する言葉。西周によって当てられたとされる。明治十年代の後半から、主に文学の世界で「現実」と対になる言葉として使われ始め、一般に広まった。

「象徴」：明治時代に活躍した思想家、中江兆民が明治初期に作った言葉といわれる。

「関税」：古くは「関所」で徴収した通行税の意で用いられた言葉。

「国際」：幕末期の漢訳『万国公法』（国際法の旧称）に見られる「各国交際」から作られた言葉。もとは「諸国家間の交際」の意だが、段々「交際」の意を失い、「世界的な」というニュアンスで使われることが多い。

例 3

外来語には英語を起源とするものが多い（80%）、その他：

ア. フランス語から：軍隊（ズボン、マント）、美術（オブジェ、クレヨン、コラージュ、コンテ、デッサン、デフォルメ）、演劇（グランプリ、シネマ、デビュー、バレエ、ボードビリアン、レビュー）、音楽（アンコール、アンサンブル、エチュード、オクターブ、コンクール、バラード）、服飾（アップリケ、シュミーズ、シルエット、ブルゾン、ベレー、ランジェリー）、料理（アラカルト、オードブル、オムレツ、カフェー、グラタン、グルメ、コロッケ、ジェフ、シュークリーム、ビュッフェ、ポタージュ、マヨネーズ）、その他（アベック、エスプリ、クーポン、サボタージュ、ディスコ（テーク）、デカダンス、バカンス、ピエロ、ブルジョア、ルポルタージュ）

イ. ドイツ語から：哲学思想（アウフヘーベン、イデオロギー、カリスマ、ザイン、テーゼ、メルクマール）、医学（アレルギー、ガーゼ、カプセル、カルテ、ノイローゼ、ホルモン、ワクチン）、理化学（エネルギー、グリコーゲン、コラーゲン、ツベルクリン）。音楽（コンツェルト、セレナーデ、バス、バリトン、メヌエット）、山岳・スキー（アルペン、ゲレンデ、ザイル、シャンツェ、シュプール、ピッケル）、その他（アルバイト、ゼミナール、ファンファーレ、メルヘン、プロレタリア）

ウ. イタリア語から：音楽（オペラ、カルテット、ソナタ、ソプラノ、テンポ、トリオ、フィナーレ）、料理（エスプレッソ、スパゲッティ、パスタ、ピザ）、その他（インパクト、カジノ、トトカルチョ、ファッショ）

エ. ロシア語から：政治経済（インテリ（ゲンチャ）、カンパ（ニア）、ノルマ）、その他（ツンドラ、トロイカ、ペチカ）

例 4

Chemise	→ sô-mi (ホワイトシャツ)
Cravate	→ cà vạt (ネクタイ)
Manteau	→ măng tô (マント)
Paletot	→ bánh tô (パルトー)
Chocolat	→ sô cô la (チョコレート)
Biscuit	→ bích quy (クッキー)
Bière	→ bia(ビール)
Antenne	→ ăng-ten (アンテナ)
Dâm	→ đâm (ワンピース)
Cafê	→ cà phê (コーヒー)
Fromage	→ phó mát (チーズ)
cinéma	→ xi nê (映画館)
balcon	→ ban công (ベランダ)
auto	→ ô tô (自動車)
poupée	→ búp-bê (人形)

savon	→ xà bông (石鹸)
affiche	→ áp phích (ポスター)
gare	→ ga (駅)
carotte	→ cà rốt (人参)

参考 3 : 参考文献

- 沖森卓也『はじめてよむ日本語の歴史』ベレ出版、2010年
 亀井孝『新しい国語への歩み（日本語の歴史）』平凡社、1965年
 砂岡和子、池田雅之編『アジア世界のことばと文化（世界のことばと文化シリーズ）』成文堂、2006年
 三木幸信『日本語の歴史』健文社、1942年
 真田信治『標準語はいかに成立したかー現代日本語の発展の歴史』創拓社、1991年
 飛田良文『講座日本語の語彙 7』明治書院、1982年
 齋藤毅『明治のことば：文明開化と日本語』講談社、2005年
 金田一春彦『日本語』岩波新書、1988年
 土井忠生『日本語の歴史』至文堂、1958年

i その言語の特徴は子音組織をもち、四母音で常に母音で終わるといふ。

ii 文字がなく、ただ木を刻んだり縄を結んだりする

iii ベトナムの首都

iv 同じ現象に、xì dầu (醤油、広東語の豉油から)、bò bía (春巻きの一類、福建語の薄餅 - pòh-piá から)、xường xám (チャイナドレス、広東語の長襪衫 - chéuhngsàam から、中国語で qipao)、dầu cháo quẩy (油条、広東語の油炸鬼から)、lạp xường (腸詰、広西の臘腸から) などがある。